

那高溪と頼山陽書卷

特251

550

352

307



始



持251

550



と
 賴
 山
 陽
 為
 為



賴山陽先生肖像

〔安藝仁方・相原格氏所藏原本〕
賴山陽顯彰會版「賴山陽全傳」より

賴山陽先生肖像自贊

賴三樹先生筆

〔大阪・森下博氏所藏原本〕
木崎好尙著「賴山陽と其母」より

木蘭校尙善「躑山圖」其母「よこ」
〔大羽・森可軒丑泖燕鼠本〕

躑 三 樹 式 主 筆

躑 山 圖 式 主 肖 繪 自 贊

躑山圖題識會社「躑山圖全輯」よこ
〔定應二式・林烈辨丑泖燕鼠本〕

躑 山 圖 式 主 肖 繪



躬偃仰一室而心
陶百代之失得非
恹已極董而愛人
家國文章滿腹不
濟子饑曲尺直尋則
所為噫是何物出
男兒乎推也烏知無
念此迂拙者之時哉

石先人書像自贊謹錄為
清華會由己為不肯投醉

賴山陽先生筆・耶馬溪詩

〔近江八幡・外村與左衛門氏所藏原本・
雲華本・「耶馬溪圖卷」より〕

雲華本。「罪惡圖卷」100
〔張正八翻。長林與古書門丑祖藏本〕

陳山陽先生筆・罪惡圖卷



明卷

卷中

下無

峯竇西、越看殊駭馬溪山天下無
何如毫釐生猶一丈也橫圖

羣仙顧盼多安石也肌膚樹心衣平
滑山如品色惟僻清瘦不垢肥

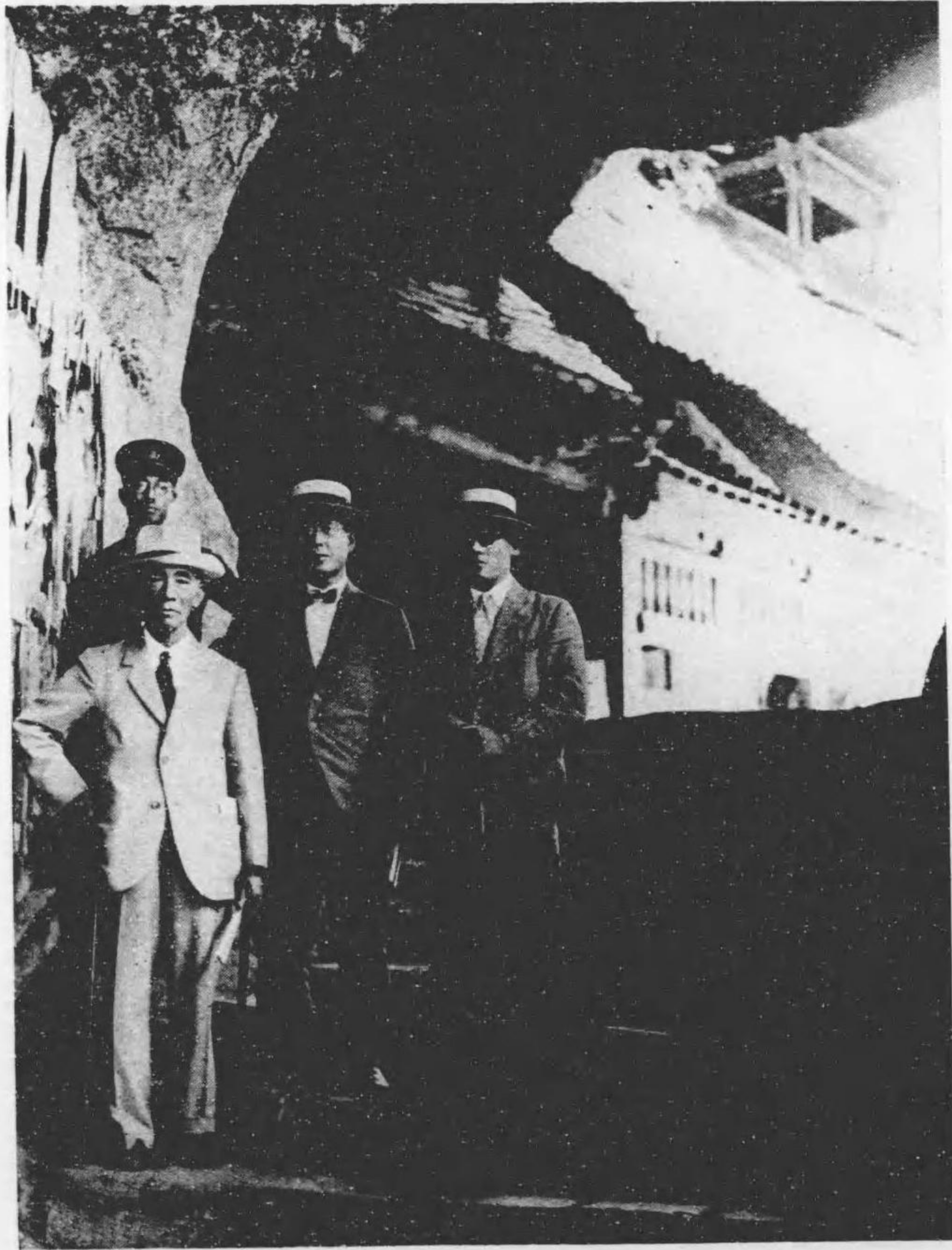
一掃屬裙束飽括公處眉目如分明
不與平生枝節馬溪溪有奇

山陽外史



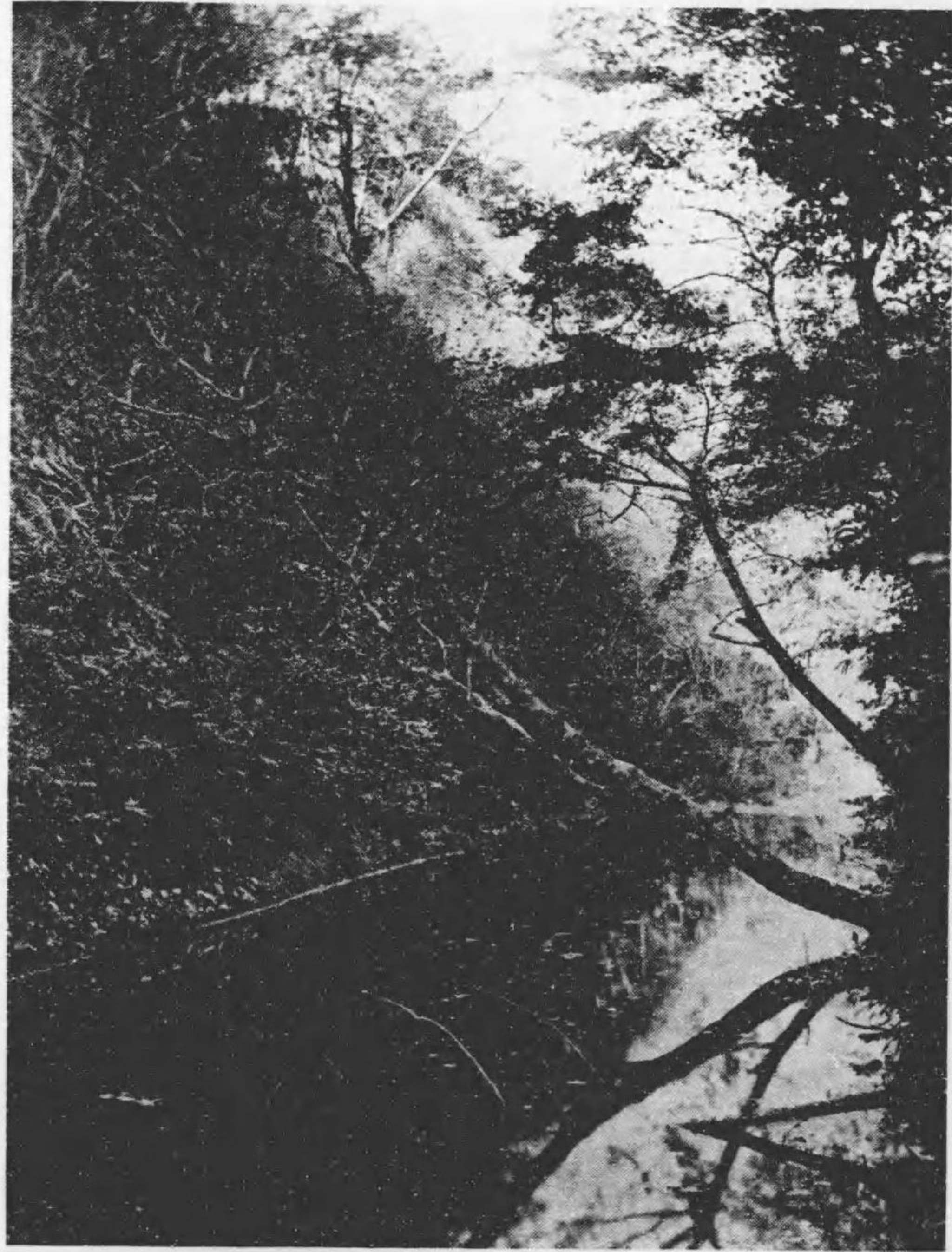


羅漢寺

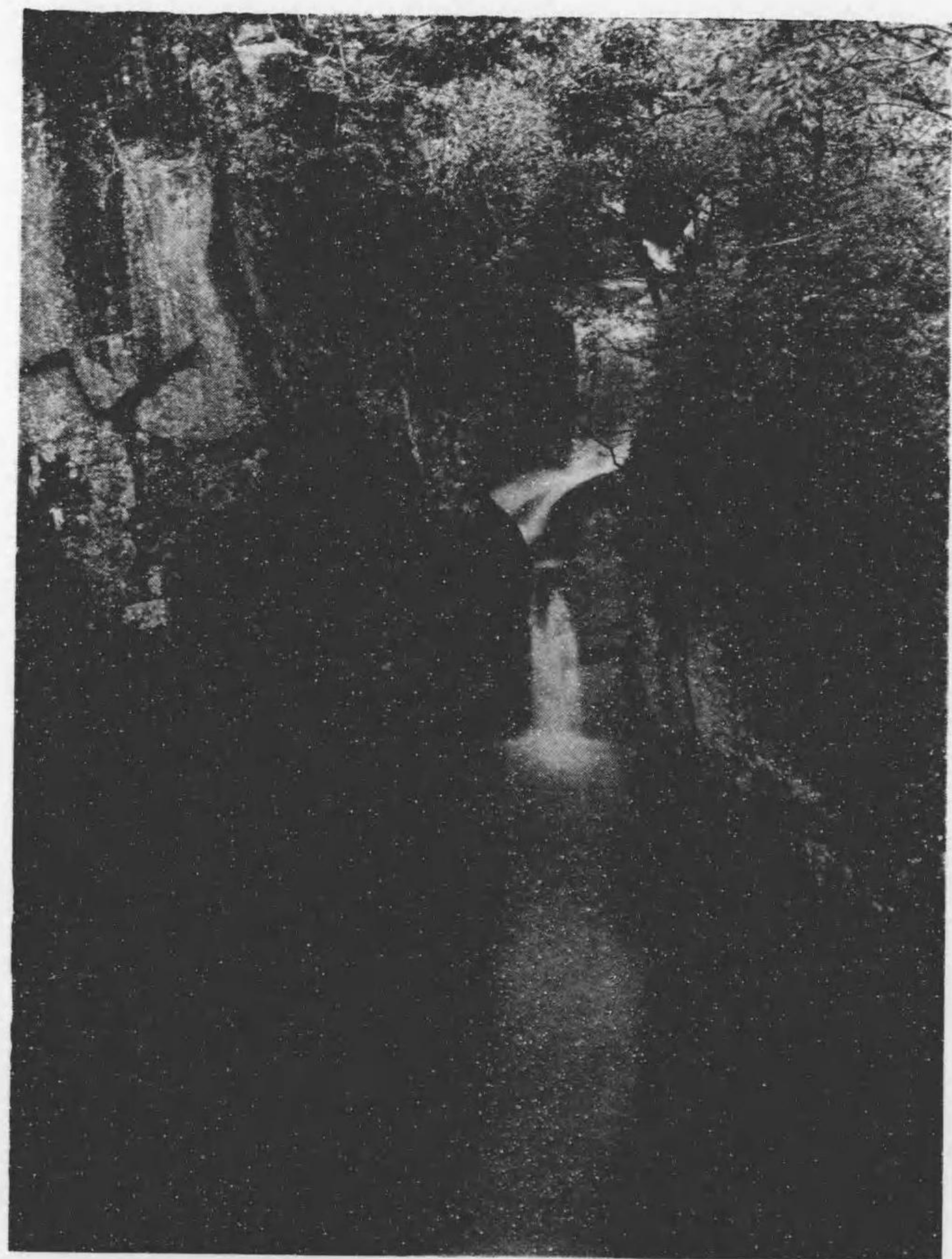


羅漢寺洞門

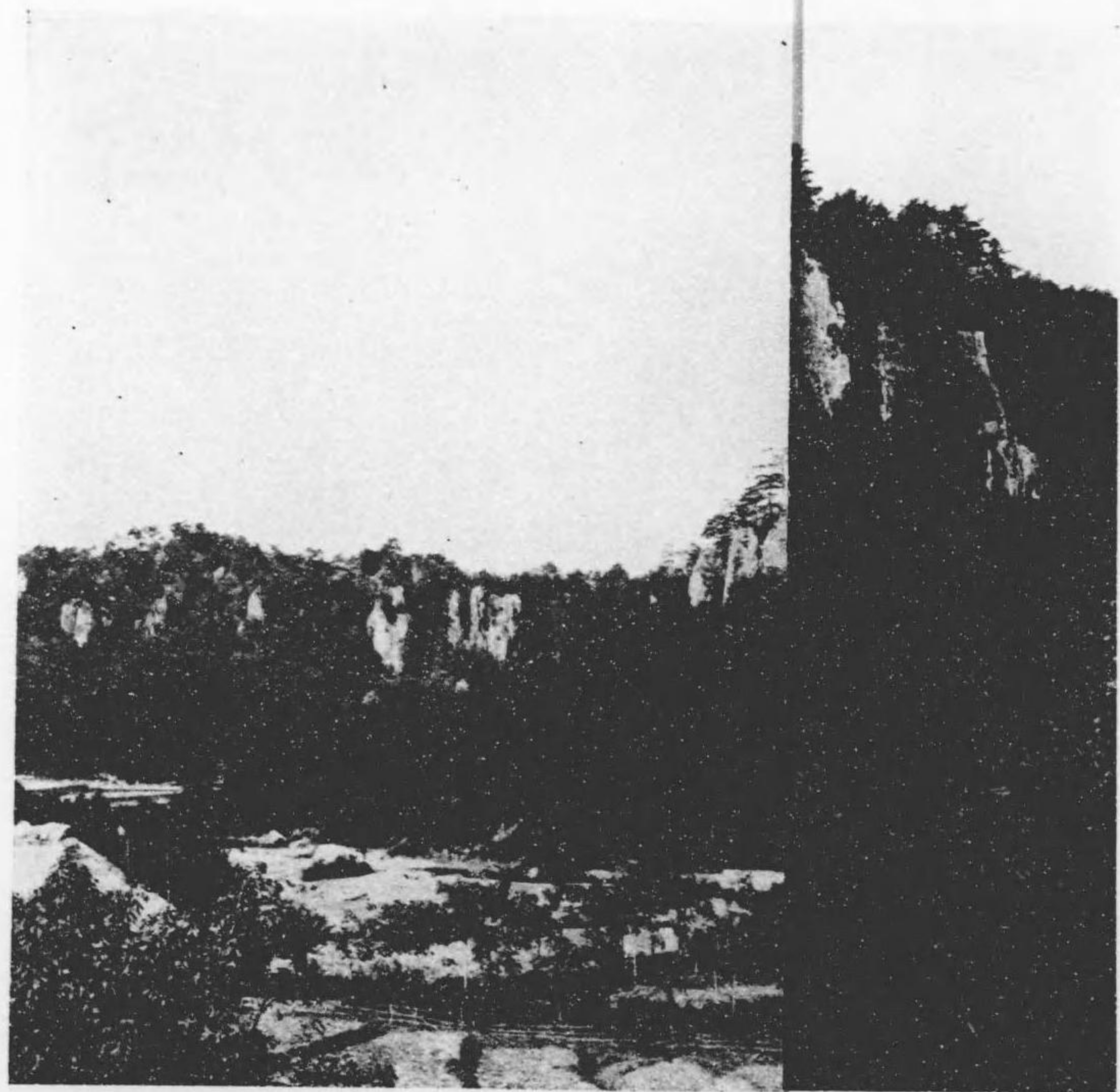
(者編・側左向)

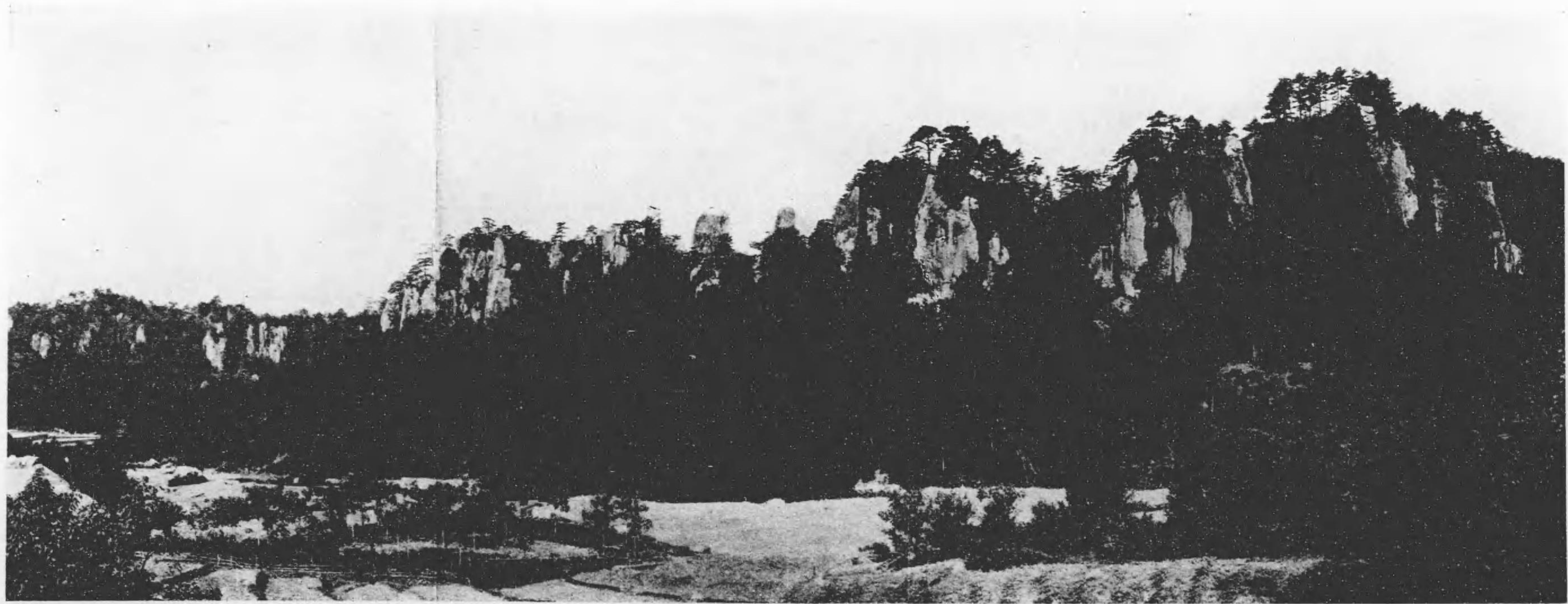


潭鏡明·溪麗

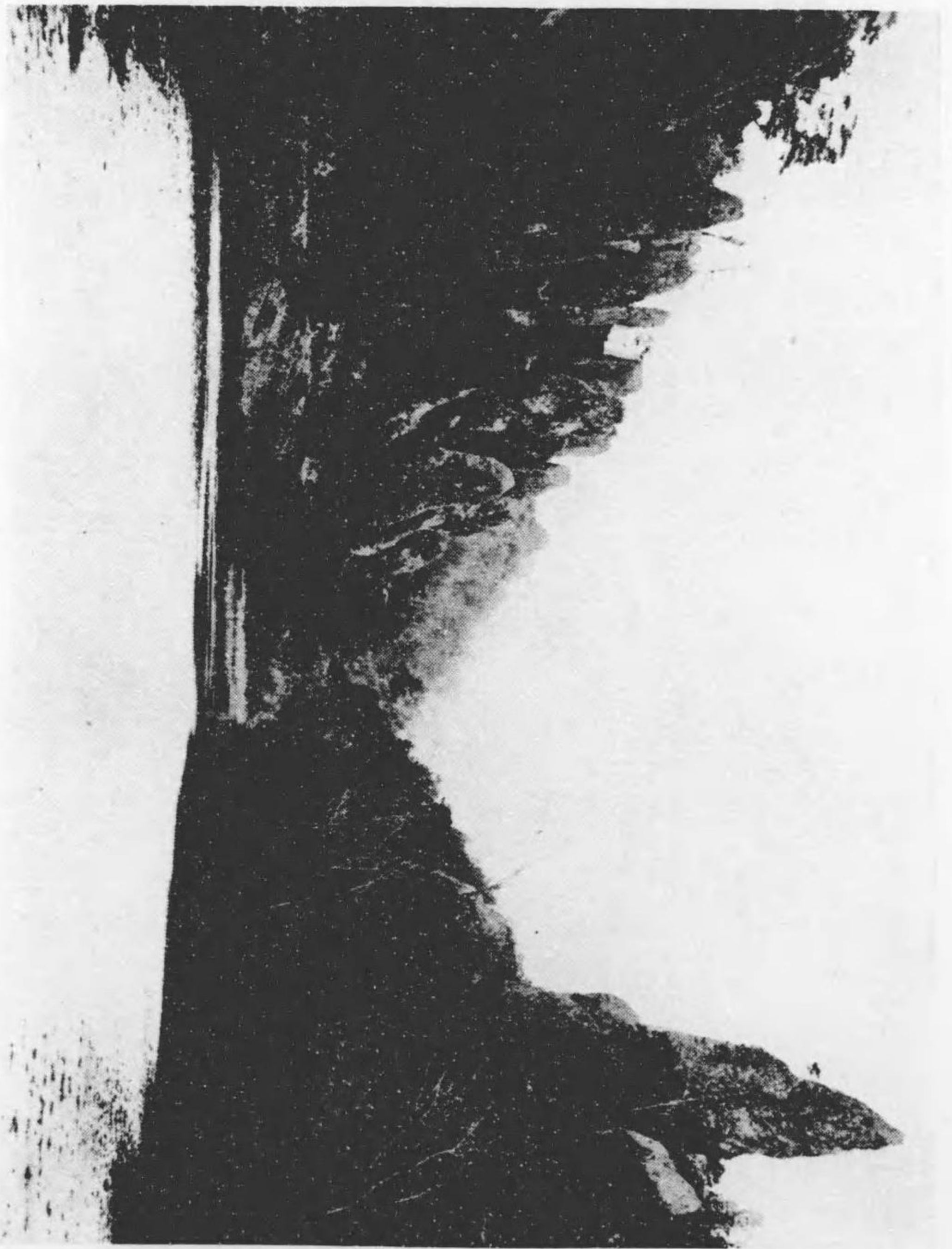


瀑木柁・溪馬耶美蔦





裏耶馬溪・立羽田全景



上の坂・溪馬耶裏





奧耶馬溪·猿飛潭

目次

耶馬溪の大恩人、頼山陽先生……………赤松翠陰…一

耶馬溪圖卷記(雲華本)及譯文……………一三

○ 頼山陽と耶馬溪……………木崎好尙…二九

耶馬溪盆をどり……………好尙散人作中津米屋町連曲…四八

耶馬溪の大恩人

頼山陽先生

中津 赤松 翠陰

我が耶馬溪山は廣く世人の知るよりに頼山陽先生の圖卷記、殊に其名畫によつて、忽ち天下萬衆の視聽を驚かし、遂に今日の如く、巖石と溪谷美を以て世上に雄視するやうになつた。

然し山陽先生よりスツト以前にも、入溪して其勝概を傳へ、殊に羅漢寺山に就いて頻に讚稱されたのは、筑前の貝原益軒の「豊國紀行」や、尾張の吉田重房が

「筑紫紀行」にも、詳細ではないが通俗文で、一通りのもよりは書き留めてゐる。惜しい事には、山陽先生の「圖卷記」には、洞門競秀峰の絶景が掲げてないが、「筑紫紀行」も、吉田が宇佐宮に参り、麻生谷から羅漢寺山に登り、路程の都合でこれも何とも書いてゐない。その外、我が中津藩儒倉成龍渚先生に、「耆閣窟山記」と云ふ長篇の遊記がある、此記文は龍渚が東上の際携へ行き、江戸にて尾藤二洲、頼春水・杏坪兄弟、樺島石梁等の諸友に示したと書いてある。「筑紫紀行」は文化三年に出版されたが、今日の如く全國に普及する事は困難で、之を讀んだ人は極く少數であらう。「豊城紀行」は當時出版されなかつたから、これは素より知る人が稀な譯である。

されば耶馬溪が天下に始めて名を知らるゝようになったのは、全く山陽先生の妙文靈筆と、且つ師遊交遊の頗る廣かつたが爲め、其宣傳が迅速であつた、これ

が即ち此溪山の知音として、更に大恩人である理由と云うてよい。其交遊の中には、「圖卷記」に第一番の極印を押し、裏書して激賞したのは即ち我が雲華院大含上人であつた。山陽先生が父春水の大祥忌を終つて、鎮西巡遊を思ひ立つたのは、景勝に富み史蹟の多きによるものなれども亦一つの理由として、無二の親友であつた竹田、雲華等が當時在國中であるから此等の諸友に邂逅して久澗を叙し、雅談を遂げようとする心組もあつたのであらうと思はれる。此時上人は先生を山房に迎へ、偶々仙人巖や、羅漢寺、其他窟中を案内された。上人唱和の詩に、「不君高眼品ニ各山一誰以ニ此溪ニ爲ニ第一」とあり、耶馬溪山の知音は山陽先生であるが、先生の最高知音は即ち雲華上人である。先生を耶馬溪の守護神として祭るならば、上人は必ず相殿に合祀さるべきものである。由來山陽、竹田、雲華とは互に肝膽相許すの心友で切つても切られぬ間柄である。上人の先生を迎へた時の詩

頼子成過訪。賦贈。

湖海文章伯。遊方訪草廬。金聲千鍊句。玉立百磨書。
觀研試珍墨。擁爐烹野蔬。挽留君請住。時下五寒初。

兩者の高會は、此詩にて充分知れるではないか。先生が西遊の途次、下の關で上人の東上登岳するに遇ひ、先生の上人に賦贈した詩も、實に豪快で、よく兩者相知の心情を吐露したものであるが、長篇ゆゑにこゝには省略する。

山陽先生、名は襄、字は子成、俗稱は久太郎、別號は三十六峰外史。家は代々安藝竹原に在り、父は彌太郎春水、名は惟寛、字千秋、壯年大坂に出で教授を業とした大儒である。母は大坂の儒醫飯岡義齋の二女、名は靜、後に有名な模範女史である。兩親在坂中の安永九年十二月廿七日に先生は生れ、天明元年、父春

水が廣島藩侯の厚聘に應じて仕官して後、先生はその地で成長されたが、幼少より神童の骨相を具へ、頗る夙慧で、八九歳頃から喜んで平家物語、太平記等の軍書を愛讀され、同じ兒戲でも先生は軍事が好きで、常に土塊を築いて城攻の形容などして娛まれた。

十八歳にして東遊を思立ち、叔父杏坪に伴はれて江戸に出で、叔母婿の幕儒尾藤二洲等に從學し、柴野栗山等に見え、大に才名を轟かした。此江戸遊學の途次先生は彩筆を揮つて驛亭の狀況を描寫されたが、そのスケッチが中々うまく出来て居るとの評判で、先生の畫才は實に天稟である。江戸遊學は僅一年にして歸國し、弱冠にして父母の勧めによつて早婚したが、先生の雄志は廣島の小天地に老朽つる事を好まず、一度は脱藩した事もあり、廿五六歳頃、春水の親友備後の菅茶山に迎へられ、彼の有名な黄葉夕陽村舎の廉塾に赴き、都講として諸生を

誘掖して居たが、荆棘は鸞鳳の棲にあらず、此處も先生には驥足を伸ばす所でない。やがて備後を飛び出し京坂を志し、先づ大坂に到り篠崎三島小竹父子の援助を受け、更に京都に上り、小石元瑞の同情を得て、京地に脚を留め、多數の老儒先輩の間に介立して儒業を開いた。才名藉甚、門生も多く聚まり、講經の傍、書畫文墨を好み、終生仕官せず、布衣の身輕、儒雅風流を以て交遊頗る廣く、而も王侯貴紳の書畫を需むる者あるも、意に協はぬ向は一切筆を執らず、超然高擧、一世を睥睨するの概があつた。

家寓は轉々して、後に三木木に移り、己が好める設計によつて、鴨涯に水西莊を營み、山紫水明處を築き、竹田、小竹、雲華、檀園、春琴等の名流を延いて朝夕相會し、悠然として高懷を伸べた。文化十三年二月父春水重病の報に接し、先生は直に旅裝を理め、晝夜兼程、廣島に歸つたが、不幸にも春水は既に逝いてる

たから、先生は慟哭措く能はず、服喪三年、文政元年春三十九歳大祥忌を終へて多年の宿意であつた鎮西巡遊の壯途に上つた。

淹遊既に半歳を過ぎ、二筑、二肥、薩隅各方面を歴覽し、郷儒名流と徴逐して、到る處吟囊を富まし、我が耶馬入溪は歸途の最後で亦最も收穫が多かつたのである。同年十二月五日、豊後隈町より始めて本溪に鴻蹤を印せられたが、「圖卷記」及び雲華上人の手帖によると、入溪日程は左の如くなつてゐる。

十二月五日 溪中、宮園村著泊

六日 古城正行寺著泊

七日 滞在

八日 同

九日 宇佐郡麻生村仙人巖下の民家著泊

十日 羅漢寺著泊

十一日 樋山路淨眞寺著泊

十二日 青村著泊

十三日 正行寺歸泊

十四日 滞在

十五日 同

十六日 中津を経て小倉、下關へ向ふ

因に、中津にて田信翁〔田中信平〕を尋ねたのは、十六日の歸途であるか、或は正行寺滞在中のことであらう。中津では京町の醫師久恒、辛島兩家の爲め揮毫されたと云ふから、或は一泊されたかも知れぬ。田信翁は此時七十幾つで貧苦の上頗る老衰して居たであらうが、崎人の事で案外餘裕があつたかも知れぬ。此時

先生の田信に贈つた詩がある。

酒間卒賦。贈田子孚老丈。

頼山陽

對汝恍如逢栗翁。詩情酒興老猶濃。記來當日稱譽語。給祿宜分鄙曼容。

老丈嘗受知於柴先生。常言。使余據一大國。與子孚以三百石。不煩

以職事。其雅愛如此。

先生は此の西遊に於て其の大名は愈々世間に高くなつたが、こは勿論「圖卷記」のみでない、其「西遊上下稿」が、亦碩學鴻儒の間に傳誦せられた。菊池五山の評點ある先生の手稿と思はるゝものを一見したが、之は雲華上人の所藏であつたと云ふ事である。爾後十五年を経た天保三年九月二十三日、咯血の餘、此の一代の大天才、我が山陽先生は眠むるが如く溘逝され、享年五十三歳であつた。先生の容貌は其の肖像にも見えるように、瘦軀高顙、眼光は炯々として、頗る威

儀があつた。常に國運衰頹して、士氣の懦弱なのを慨せられ、鉄心熱腸、終生詩文を以て一世を策勵したが、先生の勤王論は、世人の普く知る所であるから、ここでは多言はせぬが、先生は勤王の廉を以て、百年祭に當り、畏くも贈從三位に叙せられて居る、又先生は父讓りの能書家で、かねて畫筆に堪能であるから、書畫の依頼者が門前に殺到し、絹表室に滿つる盛況であつた。又賞鑑を善くし、家には古書畫數十點を藏せられた。先生は經學の外、歴史、殊に國史に造詣深く、著書數十部、中にも勤王主義の日本外史、日本政記、及び通議等最も世人に愛讀せられ、詩文の噴々たるは言ふ迄もなく、「山陽遺稿」、「山陽詩鈔」、「書後題跋」、「日本樂府」等は既に出版されたが、一昨年廣島縣顯彰會の發起で、「賴山陽全書」が出版されて讀書家を喜ばしてゐる。

先生は純忠至孝の人で、又多情多感の士であつた。壯年の頃は一時故あつて、

父春水の膝下承歡を得る日が少なかつたが、彼の易行院法海師が痛く先生を教誡したと云ふような話は、全く無根の妄説で、これは皆「豊繪詩史」に欺かれて居るのである。

先生は京都に儒門を張り、梨影女史を迎へ生活の安定のついた頃には、春水は近畿旅行を名として暇を乞ひ、京坂に上つて、山陽と絶えて久しき對面を遂げ、非常に喜ばれた。されば春水危篤の報が京寓に達した時、先生は恰も門生に對し莊子の講義をして居たが、直に卷を掩ひ急遽廣島へ向ひ、家に馳せ付いてみると、春水は既に泉下の客となつて居たので、傷心痛哭の餘り、これから終生復莊子を講じなかつた。この一事でも先生の純情至孝であつたのは知れる。春水亡き跡は、母榎颯夫人には更に一段の孝養を勵み、幾度となく歸省する外、屢く京地に迎へて供膳を張り、常に車を連ねて近畿名勝を遊覽せられた。

奉_レ母及叔父_レ〔杏坪〕。遊_レ嵐山。

賴 山 陽

嵐山峽口第三家。 三度侍_レ輿來看_レ花。

花已依然母無_レ恙。 慈顏紅映幾重霞。

遂奉遊_レ芳野。

侍_レ輿下_レ阪步遲遲。 鶯語花香帶_レ別離。

母已七旬兒半百。 此山重到定何時。〔文政十年、四十八歳作〕

山陽先生の「耶馬溪圖卷」は、記文とともに、九州遊覽の翌、文政二年に起稿して、雲華上人に贈られ、その後、文政十二年に至り、更に尾道、橋本竹下の爲に、圖卷を寫されし時、記文を改刪せられたが、最初の雲華本に錄された方が、當年の實況そのままを見る事が出来る。こゝにそれを錄することとする。

耶馬溪圖卷記 (雲華本)

余嘗讀_レ昔人畫。疑_レ其山貌太奇峭。恐非_レ天壤間所_レ有。畫人一時輿到。鼓_レ舞其筆墨_レ耳。及_レ視_レ豐耶馬溪。乃知造物奇怪。畫手亦有所_レ寫不到也。歲戊寅遊_レ鎮西。過_レ海南望_レ彥山於雲際。已覺_レ其有_レ異矣。既經_レ二肥薩隅。還入_レ豐後。寓_レ隈邑_レ數旬。臘月五日。辭赴_レ豐前。至_レ杜實村。遇_レ一水南來。蓋發_レ源彥山者。沿焉而西數十里。昏黑。覺_レ左右峯巒皆非_レ凡。山溪相迫處。鑿_レ山腹_レ爲_レ道。

又穿牖取明。余買炬以入。遇牖窺見月在溪朗然。至宮園村宿焉。翌日大霧。余恐失好山。待霧霽乃發。復沿溪西。愈西愈奇。群峯夾水。攢竦如春筍矗立。有土戴石者。石挾土者。全石者。全石破裂成洞穴者。兩石相鬪。其一欲仆者。石數層累成夏雲狀者。而樹自石罅。橫生縱生。倒生而上指。叢生蔽石。如與石爭勢。而欲勝之。石又自樹中奮躍而出。而石陰皆苔。紫綠相間。或沒石半面。或沒全身。又如援樹攻石者。大抵峰勢石皴。如董巨刻意圖。時窮冬。多老木葉脫。槎枒瘦古。皆倪黃筆法。而苔枯蹙蒼渴者王叔明也。古人筆墨不欺吾也。余頻頻駐馬絕嘆。馬夫催迫疾行。至柿阪憩孤店。店面石壁百餘尺。飛泉懸焉。仰則更有高峰。不知其幾百尺。余急釋所佩酒瓢。命燂之。與店主對酌。竈突蕭然。莫以佐酒。會一獵師新獲豪猪。割而煮之。肪脆如水。余連引數大白。又騎馬行。溪又數曲。隨峯勢上下。或

爲激雷噴雪。或停膏凝碧。峯影又或碎或全。似水妬山而亂其影也。至屈智林。溪稍開。山稍舒。有小市。過一橋。自此行溪北。開者益開。數十里詣古城正行寺。寺主含公余故人也。竚余既久。余未交數話。先詫曰。君州山水大奇大奇。含公曰。更有羅漢寺。仙人巖。使子目之。其驚當更甚。居一日。與含公及周山。墨莊。大宣。出古城南行。行田坡滕壠間。至仙巖。巖石突立山頂。含公顧余曰。如何。余不甚賞。即夜宿巖下民家。其明又行山壠間。出羅漢寺。寺据山。鑿山作洞壑橋梁狀。安五百像。含公又顧余。復不甚賞。宿寺前逆旅。蓋寺以勝著。四方來觀。故有逆旅爲生者。夜挑燈飲酒。評論山水。余曰。山不得水不生動。石不得樹不蒼潤。是余所以賞馬溪。而不賞仙巖。至於羅漢。則人工焉耳。然皆馬溪之支裔矣。且馬溪溪山相迫。無田坡滕壠礙於人目。而其道坦夷。無甚餽飢。真可遊也。然以其爲一豐通道。

過者慣看為常。況公等生長其土。宜不愜其奇也。余則再遊不可期。將復溯之以諦觀之。諸公能從我乎。含公奮袂與偕。曰。從子受下觀山水訣也。早發過一水。北出馬溪口。峯容樹色。忽覺迥別。自淺入深。自平入奇。泝前數曲者。一曲奇於一曲。比諸前遊。更可喜也。復至絕壁間孤店。店主識余面。驚曰。是前喫猪客也。有何幹再來此邪。余曰。欲看山耳。曰。山有何好看。吾不禁子看也。遂席溪畔。與含公傾瓢。一醉宿檜山寺。淨真寺。明日雨。借轎西還。山峰得雨。皆變幻作態。或前以為一山者。分成數峯。如群仙駢肩。露其半身。萬松振鬣。鼓濤於雲中。又如二十五菩薩奏樂而至也。亦一奇也。還至屈智林。含公慮吾酒盡。預戒家僮。馱檜於馬來。取醉上轎。含公騎其馬先行。余抵橋。轎底崩脫墮泥。就市店燎衣。遂穿鞋而行。含公又舍馬穿鞋。宿阿保村。墨莊又來。翌歸正行寺。又三日辭去。

踰海東歸。自海雲中。顧望鎮西山岳。其屬豐前者。皆有異態。而彥山其尤大者。蓋耶馬一溪。山水皆自彥山發脈。故與他境獨異也。余足跡幾半海內。弱冠東遊。得妙義山以為無雙。今馬溪百里。如妙義者。不知幾十峯。謂之海內第一。或不誣也。今茲己卯臘。憶起昔遊。肱棗得爾時寫山粉本數紙。不相接屬。今尋諸胸臆。冥搜默運。戲為橫長一卷。又記其來由。附以所得小詩九首。嗚呼余詩文。不足髣髴其萬一。況於畫乎。後有能者如董巨倪黃之類者。踴其境而補成之。庶幾不負此好山水。然目此山水。為海內第一者。乃自賴子成始。

詩九首

峯容面面趁看殊。耶馬溪山天下無。安得彩毫如董巨。生縮一丈作橫圖。

純石爲峰勢欲飛。峰頭更戴幾崑峩。西州索畫終無獲。
 獲此天然黃太癡。群仙顧眎各多姿。石作肌膚樹作衣。平昔評山如品色。
 唯憐清瘦不憐肥。簇出奇巖勢接連。插天碧笋茁春烟。一峰別起形相類。
 山脈知如竹迸鞭。一瞥孱顏未飽情。今遊眉目始分明。賞心不負平生履。
 耶馬溪頭兩度行。酒貯半瓢紅滴瀝。山經千嶂碧峻嶒。又欣一事尤難獲。
 許飲同遊有韻僧。山屐何辭泥路新。天將變套待遊人。群峰得雨如龍鬪。
 山屐何辭泥路新。

隱躍雲間見爪鱗。寫山不厭雨傾盆。植杖探囊筆屢援。却倩同行扶掣紙。
 笠檐餘滴暈生痕。萬巖影碎碧潺湲。慣看行人渾等閑。從古喧傳羅漢寺。
 何知剩水與殘山。

文政己卯十二月五日。山陽外史。併錄于鴨河之有酒無事之樓。
 余落此卷。適含公在京來訪。觀而激賞。遂欲得之。余營連累日。纔得成
 之。將酌酒披對。以想昔遊。而忽爲人奪去。何以爲情。因謂之曰。師
 之州有眞者。何用假爲。公曰。吾因子知愛鄉山。而雲遊四方。未嘗不
 夢寐之。故欲得此卷。置諸橐中。時出玩慰心。譬如人家有美姬。而出
 遊寫影自隨耳。余曰。馬溪群巖。並皆絕色。而余筆墨醜了之。吾眞馬溪之

毛延壽也。公歸。幸爲余謝之。遂舉以爲贈。』襄又識

二〇

同子成。遊耶馬溪。十二月九日至
十三日歸寺

雲

華

萬峰峙兩岸。一水流其間。空翠滴君袂。紫嵐吹君顏。
荒陬一入佳士筆。譬如良相舉遺逸。不君高眼品名山。
誰以此溪爲第一。
好事如君有幾人。枯筇兩度度嶙峋。馬溪山水逢知己。
姑被柔毫細寫真。
山自岩嶢水自明。援毫天地攬精英。知君遠道多歸思。
此際消過幾日程。

品山評水日將曛。乞宿村民臥白雲。供給芋魁君莫笑。
野情元不貴羶葷。
烟雲寫畫雨題詩。數日同遊筆硯隨。品得佳山佳水處。
喜君鞋襪不知疲。

耶馬溪歸路。贈賴子成遊山杯。

數日斟山水。無情不快哉。他時君記念。手贈白雲杯。
十二月廿七日。有懷山陽賴研兄、研兄以今月六日過山房。
至十六日發輒。挽而不留。曰。要廿七日歸到藝州。蓋以其
誕日。慰母心也。

鎮西風候入歸吟。海驛山關雨雪深。想見北堂今日宴。
一行當慰倚門心。

二一

圖卷記譯文

余嘗て昔人の畫を讀み、其の山貌の太だ奇峭なるを疑へり、恐らくは天壤間有る所にあらず、畫人一時興到り、其の筆墨を鼓舞せるのみと。豐の耶馬溪を觀るに及び、乃ち造物の奇怪、畫手亦寫し到らざる所あるを知れり。歳の戊寅、鎮西に遊び、海を過ぎて、南彦山を雲際に望み、已に其の異なるを覺ゆ。既にして二肥薩隅を経、還豊後に入り、隈邑に寓する數旬なり。臘月五日辭して豊前に赴く。杜實村に至り、一水の南來するに遇ふ、蓋し源を彦山に發する者、沿うて西すること數十里、昏黑なれど、左右の峰巒、皆凡に非ざるを覺ゆ。山溪相迫る處、山腹を鑿ちて道となし、又廂を穿ちて明を取れり。余炬を買ひて入る。廂に遇うて窺へば、月の溪水に在りて朗然たるを見る。宮園村に至つて宿す。翌日大霧、

余好山を失はんことを恐れ、霧の霽るゝを待つて乃ち發す。復溪に沿うて西す。愈々西すれば愈々奇なり。群峰水を夾み、攢竦すること、春笋の矗立するが如し。土の石を戴く者、石の土を挾む者、全石の者、全石破裂して洞穴を成す者、兩石相闘ひ、其一は仆れんと欲する者、數石層累して夏雲の狀を成す者あり。而して樹は石罅より横生するもの、縦生するもの、倒生して上指するもの、叢生して石を蔽ふもの、石と勢を争ひ、之に勝たんと欲するが如きものあり。石又樹中より奮躍して出づ、而して石陰皆苔にして、紫綠相間はり、或は石の半面を没するもの、或は全身を没するものあり。又樹を援けて石を攻むる如き者あり。大抵峰勢石皴は董巨刻意の圖の如きなり。時に窮冬老木の葉を脱する多く、槎枒瘦古にして、皆倪黃の樹法なり。而して苔の枯蹙蒼渴せる者は王叔明なり。古人の筆墨吾を欺かざるなり。余頻々馬を駐めて絶嘆すれば、馬夫は疾行を催迫す。柿阪

に至り孤店に憩ふ。店は石壁の百餘尺なるに面し、飛泉懸れり。仰げば更に高峰ありて、其の幾百尺なるを知らず。余急に佩ぶる所の酒瓢を釋き、命じて之を燗めしめ、店主と對酌す。竈突蕭然酒を佐くるものなし。會一獵師新に豪猪を獲たり、割いて之を煮しむれば肪脆水の如く、余連に數大白を引けり。又馬に騎して行く。』溪又數曲、峯勢の上下に隨ひ、或は激雷雪を噴き、或は停膏碧を凝らすあり、峯影又或は碎け或は全くして、水の山を妬みて其の影を亂さんとするに似たり。屈智林に至れば、溪稍々開け、山稍々舒び、小市ありて一橋を過ぐ。此れより溪北を行けば、開くる者益々開け、數十里にて古城正行寺に詣る。寺主含公は余が故人なり。余を俟つこと既に久しかりき。余未だ數語を交へず、先づ詫して曰く、君が州、山水大奇大奇なりと。含公曰く、更に羅漢寺、仙人巖あり、子をして之を目せしめば、其の驚き當に更に甚しかるべしと。』居ること二日、

含公及周山、墨莊、大宣と古城を出で南行し、田坡陞瓏の間を行きて仙巖に至る。巖石、山頂に突立せり。含公余を顧みて曰はく如何と、余甚だ賞せず、即夜巖下の民家に宿せり。』其の明、又山壠の間を行き、羅漢寺に出づ。寺は山に据り山を鑿ち、洞壑橋梁の状をなし、五百像を安んせり。含公又余を顧む。復甚だ賞せず。寺前の逆旅に宿す。蓋し寺は勝を以て著はれ、四方來觀す、故に逆旅生をなすものあり。夜燈を挑げて酒を飲み山水を評論す。余曰く、山は水を得ざれば生動せず。石は樹を得ざれば蒼潤ならず。是れ余が馬溪を賞して、仙巖を賞せざる所以なり。羅漢に至つては人工のみ。然れども馬溪之支裔なり。且馬溪は溪山相迫り田坡陞壠の人目を礙ぎるなく、其道は坦夷にして、甚しき饑飢なし、眞に遊ぶべきなり。然れども其の二豊の通道たるを以て、過ぐる者看るに慣れて常となす。況んや公等其の土に生長す、宜なり其の奇を慰らざるや、余は再遊期すべからず。

將に復之に溯り之を諦觀せんとす。諸公能く我に從はんか。含公袂を奮ひ、與に偕にせんとす、曰く、子に從つて山水を觀るの訣を受けんと。』早發して一水に過ぎ、北、馬溪の口に出づれば、峯容樹色、忽ち迥に別なるを覺ゆ。淺より深に入り平より奇に入り、前の數曲の者に泝れば、一曲は一曲より奇にして、諸を前遊に比すれば更に喜ぶべきなり。復絶壁間の孤店に至る。店主余が面を識る、驚いて曰く、是れ前に猪を喫したる客なり。何幹あつて再び此に来るか。余曰く山を看んと欲するのみと。曰く。山、何の好看かある、吾れ子が看るを禁せざるなりと。遂に溪畔に席して、含公と瓢を傾け、一醉して檜山寺「淨眞寺」に宿せり。』明日、雨、輜を借りて西還す。山峰雨を得て皆變幻、態を作し、或は前に以て一山と爲し、者、分れて數峯と成り、群仙肩を駢べ、其の半身を露はすが如く。萬松鬣を振ひ、濤を雲中に鼓するは、又二十五菩薩の樂を奏して至るが如

し。亦一奇なり。還届知林に至る。』含公吾が酒の盡くるを慮り、預じめ家僮を戒しめて、樽を馬に駄して來らしめ、酔を取つて輜に上る。含公其馬に騎して先行す。余橋に抵れば橋底崩脱して泥に墮つ、市店に就いて衣を燎り、遂に鞋を穿ちて行く。含公又馬を捨て鞋を穿ち、阿保村に宿せり。墨莊又來る。翌正行寺に歸る。又三日にして辭去し海を踰えて東歸す。』海雲中より鎮西の山岳を願望するに、其の豊前に屬する者は皆異態あり。而して彦山は其の尤大なる者なり。蓋し耶馬一溪の山水、皆彦山より脈を發す、故に他境と獨異なるなり。余が足跡幾んど海内に半す。弱冠東遊し、妙義山を得て以て無雙と爲せり。今馬溪百里、妙義の如き者、其の幾十峰なるを知らざれば、之を海内第一と謂ふも或は誣いざるなり。今茲己卯之臘、昔遊を憶起し、橐を舐きて、爾時山を寫しし粉本數紙を得たるも、相接屬せず。今諸を胸臆に尋ね、冥搜默運して、戲に横長一卷となし、

又其の來由を記し、附するに得る所の小詩九首を以てす。嗚呼余が詩文其の萬一
を髣髴たらしむに足らず、況んや畫に於てをや、後の能者董巨倪黃の類の如き者
ありて、其の境を踏んで而して之を補正せば、庶幾くは此の好山水に負かざらん。
然れども此の山水を目して、海内第一と爲す者は、乃ち賴子成より始まる。

頼山陽と耶馬溪

——中津市、忘言亭に於ける歓迎會の講演——

『山陽と竹田』主筆 木崎好尚

私わたくしは大阪おほさか生れでございりますが、その大阪おほさかといふ所ところに生れたといふ事ことにつきま
して、非常ひじょうに肩身かたみが廣ひろく、それを名譽めいよと心得こころえ、光榮くわうえいと感かんじ、且かつ大おほきな誇ほこりと致いたし
て居をります。

と申まをすは、私わたくしと同じく大阪おほさかで誕生たんじやうされました福澤ふくざ先生せんせいと、山陽さんやう先生せんせいの外ほかに、大
阪さかの地ちで永遠えいゑんの眠ねむりをつゞけてゐる竹田ちくでん先生せんせいと、この三大だいさん先生せんせいを持もつて居をるからで

あります。

誕生地と墳墓の地、それは吾々人間として、命のつながる所、魂の宿るところ、これ程崇高な靈感はないのであります、どこで生れたかといふ事、どこにその人の魂が安らかな眠りを取つてゐるか、人間第一の靈感作用が、こゝにその源を發するのであります。福澤先生の誕生地は、御承知の如く、大阪の堂嶋川玉江橋北詰東へ入る所になりました中津藩御藏屋敷の官舎で、山陽先生は江戸堀川撞木橋と犬齋橋の北詰眞中程の濱側江戸堀北一丁目と申す所に生れ、さうして竹田先生は、土佐堀川筑前橋の北詰西の方、岡藩御藏屋敷の官舎で歿し、遺骸は天王寺の西北の方、口繩坂の坂の上に夕陽ヶ丘と申しまして、平安朝の歌人藤原家隆のカリツ家といふ名所に近い淨春寺の墓地に埋葬となり、そこに立派な墓碑が立ち、「竹田先生墓」と云ふ墓表を刻してありますが、それは友人篠崎小竹先生

の名筆で書かれてあります、定めて竹田先生の遺言により筆を取られたものかと存じます。それで又一寸申して置きたいのは、この小竹先生のご事で、同じく大阪に生れ、大阪で一生を送られました、その實家は豊後杵築の八坂村——八坂川の加藤家から出られました、大阪京町堀川兩國橋でお醫者をしてゐられた、加藤周貞——吉翁の子、金吾さんと申しますが、即ち小竹先生の幼名でございませう。それで八坂の實家の方は、お父さんの吉翁の弟傳兵衛と申す方が、主人として家を繼がれて、その五代目の當主——只今の縣會議長八坂三治さんの代になつてをります。即ち竹田、山陽の親友であつた小竹が、是れ又同じく大阪人として、さういふ關係であつたのでございしました。

福澤先生の誕生地には、只今記念碑が立つてをりますが、慶應年間に江戸三田新錢座の慶應義塾——私は慶應元年に生れまして、そこに又私として一つの親

しみのある慶應義塾を開かれた福澤先生の記念碑に對しまして、私は山陽先生誕生地の碑を建設したといふ望みを持ちまして、只今大阪の有志者の間にそれが發起されてをるのであります。で今度こちらへ参りまして、赤松翠陰さんのお宅へ参り、その途中、私の存じて居りました神戸の水嶋鐵也さんの誕生地記念碑が、その御舊宅の址に立てられてありますのを御見受けしましたのも、この話につながつて、感慨無量でございます。

二

さて、私は及ばずながら、年來竹田、山陽兩先生の事蹟を十分取調べたいと存じて居ります折柄、一昨年は山陽先生の百年祭で、廣島を始め、おほよそ先生に何等かのゆかりのある各方面に於て、それ／＼記念祭の盛大な催しがありました。私も廣島顯彰會の記念事業の一つとして、「山陽全書」の編纂を囑託せら

れ、その百年祭の當日は、廣島へも参りましたが、あの空前絶後——將來ますます二百年三百年と、次第にその年が重なるにつれて、だん／＼盛大な記念祭が催されるに違ひないと思ひまするにつけて、竹田先生の百年祭は、つい目の前——明年に迫つて参りましたので、こちらの大分縣は申すに及ばず、山陽先生と同じく何等かの關係ある各地有志の方々は、それぞれ記念祭を催さるゝでありませんか、私個人と致しましては、自分の事を申し上げて如何かとは存じますが、先年「大風流田能村竹田」と申すのをいたしました因みで、此度は「竹田先生眞蹟百選帖」——先生の眞蹟疑ひなき神品百幅を集めて——これも同じく山陽百選帖を出しましたのと同じ體裁の畫帖——畫集を作りたいと申すわけで、此度こちらへお邪魔にあがりましたような次第でございますから、今日の好機會を何よりと存じまして、皆様方の御聲援に預りたいと存するので御座います。

前口上まへこうじやうが長ながくなりまして恐入おそれいります。元來ぐわんらい山陽先生さんやうせんせいの九州巡歴しゅうじゆんれきと申す事こと、そのお話は申上まをしあぐる迄までもなく、先生せんせいの一代だいに最も深ふかき意味いみがあり、尤も廣ひろき交渉かうせふがあり、その中なかでも、この耶馬溪やまけいの發見はつけん——發見はつけんと申したい、その發見はつけんと申すことにつましても、さまざまな意味いみがございまして、同時に、耶馬溪やまけい——今いままでには誰たれも注意ちゆういしてゐなかつたこの山國谷やまくにだにの山水さんすい——尤もこちらの倉成龍渚先生くらなりりゆうしよせんせい——春水しゆんすい、杏坪きやうへいと江戸えどで親したしくされました龍渚先生りゆうしよせんせいは、いつも杏坪きやうへいに向うて自慢じまんされ、わしの郷里きやうりには、山國谷やまくにだにといふ素晴すばらしい山水さんすいがある、あれを一度あなたに見せたいものだと、口癖くちくせのようにいはれた——と申す事ことが、山陽さんやうの耶馬溪圖卷やまけいづくわんに、杏坪きやうへいは跋文はつぶんにさういふことを書いて、龍渚りゆうしよがいつもその話はなしをしてゐたから、自分じぶんも長崎ながさきへ呂宋ルソンに漂流へうりうした廣島ひろしまの漁夫ぎよふを送おくつて來たのを受取りうけとに出張しゆつちやうする途中とちゆう、耶馬溪やまけいといふのを見たいと思つたが、何分役人なにぶんやくにんとして出張しゆつちやうする旅たびであるから、殘ざん

念ねんながら實見じつけんは出來なかつた、そこになると、甥むすこの久太郎ひさたろうは果報者くわほうもので、官邊くわんべんには何なんの關係くわんけいもなく、優遊いうゆうした浪人生活らうにんせいかつの身みの上うへで、十分ぶんにその山水さんすいに親したんで、こんな大作たいさく——大きな畫卷えまきをかいてゐるのは、誠まことに羨うらやましいと書いて居をります。それは何も杏坪きやうへいへだけ、龍渚りゆうしよが話はなしたのではなく、春水しゆんすいへも同様どうやう、春水しゆんすいの方が、よい顔を合あはすことが多おほかつたから、春水しゆんすいもよく耶馬溪やまけいの名なを聞いてゐたことは明らかあきで、それで山陽さんやうは父ちちや叔父おじの口くちから、幼こない時分じぶんより耶馬溪やまけいといふことを知しつてゐたのでありませう。

尤も耶馬溪やまけいといふのは、山陽さんやうの命名めいめいでありますが……私わたくしも、昨晩さくばんは山國屋やまくにやといふ宿屋やどやに泊とまりましたが——この宿屋やどやも一つ、耶馬溪屋やまけいやとしたらよささうなものだと考かんがへましたが、どうも耶馬溪屋やまけいやでは語呂ごろが悪い、汽車きしやの方はその反對はんたいに、山國鐵道やまくにてつだうでは面白おもしろくありません、耶馬溪やまけいでなければ今日の御盛況ごせいけいは見みられますまい。

それで、山陽は九州からの歸りに、備後の茶山を訪問して、この山水の話で持ち切り、それを又くはしく茶山が「筆のすさび」に筆記したのを見ますと、矢張り山國川くくと書いて居ります。山陽は無論、耶馬溪とは口ではいはず、山國の名で話しをして、詩文の上では耶馬溪と書き、その耶馬溪發見が大自慢で、それに日本一と云ふ折紙をつけましたことが、文人仲間では大問題として、がやくと騒ぎ立ち、日本一とは何だ、耶馬溪が日本一とはけしからん、とさまざま反對論が飛び出したのはばからしいが、そんな事をくり返しく、青筋を立て、皆が言つてゐる内に、おかげ様で莫大な廣告料なしに、それが大廣告大宣傳となり、山陽が尤もか、反對が當然か、おれが一つ實地を見て、それを鑑定してやらうと、皆がこの耶馬溪へドシく足を向け、贊成者と反對論者が、鎚を削つた——いや今日もまだ削りつゝあるおかげ様で、結局それが耶馬溪鐵道の書き入れになり、同

時に中津市へ旅費が落ちると申す結構な事になつてをります。

三

その生前からして、一體山陽といふ人は、その言ふ事、爲る事、何一つ、針の先ほどの事を、棒のように大きく、他人の口にかゝらない事はありませんでした。と申しても山陽の大精神——尊王愛國、國體主義の上には、誰も頭は上らないが、その他は何でも彼でも、山陽に反對する人が多い。それは皆自分は山陽よりもエライ人間だと、人にはせたいといふ、さもしい了簡から反對する利己主義が、その又反對に山陽の人物をダンく偉大にしたわけでございます。茶山は流石それを見抜いて、山陽ほど人に妬まれるものも少ない、それもその筈で、詩に、文に、書に、おまけに書まで、何一つその天才をひらめかさぬ物とはない、それをやかれるのは、當り前だと申してをりますが、山陽自身も、自分ほど彼

是いはれる人間はないとこぼしてをります。耶馬溪を日本一といふと、妙義山を
 何うしてくれるんだ、日本アルプスを何うするのだなど、横槍を出したがる。中
 にもその反対の重なる妙義山との比較で、アノ男は實際妙義を見てゐないから、
 耶馬溪がうのだと、うそふいてゐる人もありますが、いづくんど知らん、妙義山は
 山陽十九歳の夏、江戸遊學の歸りに、叔父杏坪と同道して、木曾街道を道中した
 時に、いやでも應でも、妙義山が目にはいらぬわけはありますまい、杏坪の如き
 は堂々と長編の古詩も作つてをります。さういふわけで、十分妙義を目安に置い
 てさうして耶馬溪と角力を取らせて、團扇をこちらへ上げたので、妙義の妙もよ
 く知つてはゐるが、耶馬溪の方がより以上日本一だと感覺したのです、感覺とい
 ふ事——それは人々皆一様ではありません、瘡せたのが好い、イヤふとつた方が
 美人だと品定めする、鯛が旨い、ナニふぐがたまらぬといふ、そんな事はどちら

でも一向差支がない。めいゝの感覺一つですが、山陽が耶馬溪を日本一と申し
 たのには、そこに動きの取れない理窟が一つある。それは山と水との調和美といふ
 ことに歸著しますが、今一つ山陽は、竹田と同じく文人畫——南畫のくろろとで、
 南畫の大本山——元明諸大家の山水の標本、そのまゝの御手本を、始めてこの耶
 馬溪で實見した、そのよろこびの聲が迸つて、それを日本一だと極めをつけたの
 であります。日本の山水は、山の工合が、みんな丸々と、肥え太つて、圓山四條
 派の畫になり、悪くすると俗氣満々、鼻持のならぬ下卑た山水になります。元來
 「山水」は、どこにもあるが、精神的に見た山水の靈感作用と申す事は、人間最
 上最高の心の置き場でございます。高尚にして森嚴、獨立獨行、どうかすると鄙
 吝下劣な動物的なものに墮し易い心を引きしめて、神々しい一つの天地、峨々た
 る山を仰ぎ、洋々たる水に臨み、大自然を己が胸中に藏するといふ、言ふに言

はれぬ靈感を自身の心に作用して見る山水、そこに山水畫が生れることは申すまでもありません。

この大切な意味は、今日悲哉、すべて没却され、この神々しい山水を土足にかけてふみにちり、それを稱して征服すると申して、得意になつて居ります。馬鹿くしさも程がある、人間それ自身の微力が、何として深山幽谷を征服するなどといふ大それた廣言が、どこから出るものでありませう。征服どころではなく、それを冒瀆する不敬な態度で、口幅つたいことを言つて居ると、行衛不明になつたり、日射病にかゝつたり、雪中に凍え死んだり、それは皆山水をおもちやにした當然の天罰でありませう、と申して、私は決して山水にあこがれることを、何うの此うのと言ふのではありません。人間の肉體は山水を踏破して、それを鍛錬し、人間の精神は山水の靈氣にふれて、向上させねばなりません。私自身にも

それを心掛け、この年になるまで、山水慾は決して人後には落ちませんが、只いやな言葉は「征服」など、いふ大それた了簡は慎まなければならぬと思ふ迄であります。

それで山陽は、御承知の如く、文化十三年に父春水を亡ひ、三年の喪を終つて、文政元年卅九歳の春、廣島へ歸つて忌祭墓參の上、浩然の氣を九州の山水によつて養はんが爲、こちらへ參り、最初の長崎迄の豫定を延長して、肥後薩摩へ足を伸ばし、熊本へ立ち戻つて、それから日田の隈町へ參りましたが、山水を戀ふ心は、山水畫の上につり、村井琴山の息子村井古香冠吾の宅で見せられた如泰の名畫に心がひかれ、三度目の熊本行に、隈川——筑後川を下り、村井に談判して、何うあつてもあの畫を譲つてくれといふ、村井は受けつけませんでした、君が往復三度迄も宅へ来て、それ程やかましく言ふ程の畫なら、こちらはいよく大切

にしなればならない、手ばなすことは絶體にならぬ、我家の寶として子孫につ
たへなくちやならぬと、とう／＼がんばつてはねつけました、ナニその畫は先代
の琴山が何處からか、襖の下張になつてゐたのを貰つて來た代呂物で、村井の方
では、さのみそれほどには思つてゐなかつたのを、山陽が正直にそれを大名品だ
と折紙をつけましたのが大失策でした。そこです／＼引返して、日田を立ち、
正行寺の雲華上人を訪問すべく、廣瀬淡窓に見送られ、その親類、館林萬里と
守實で別れ、如泰の畫でつまらぬ顔して、しほ／＼山國川へさしかゝつて、ふと
そこらの山のたゞずまひを見ると、是はしたり、多年あこがれてゐる董源・荆關
——南畫の本山の畫にも見られぬ山の姿、それを一目見て、如泰どころの騒ぎで
なく、忽ち大注射を受けて、總身の血が湧き返り、あたまは冴える、脈は波立つ、
雲華も正行寺もどこへやら往つてしまひ、たゞ／＼無我無中に耶馬溪の山の中

へ引ずり込まれ、屏風岩を正面に、寒風はだをつんざく十二月の末、折柄油切つた
猪料理で、道中じまんのひようたんを手酌でぐい／＼、神心恍惚の三昧境には
いりました。それは九州旅行の壓巻で、ことに三月から十二月まで、永の道中でへ
ナ／＼になつたからだは、一瞬に蘇つて、この日本一を大自慢に、一つ雲華を
驚かしてやらう、と、その翌日、お寺へいそぎ、挨拶もあとに、含公、今まであ
なたには何一つ頭を下げなかつたが、今度といふ今度は兜をぬいだ、さすがは日
本一だ、大いしたものだといふ。藪から棒で、雲華、ふしぎな顔して、ナニが日
本一だ。なにがも何もあつたものか、あの山國谷の山水を、君はなぜ早くから話
さなかつたのだ、友達甲斐もないじやないか。ア、山國谷か、イヤさういへば成
る程、あすこは一寸變つてゐるが、ワシは年中何心なく見てゐるから別段なん
とも思つてゐなかつたが、それ程氣に入つたなら、もつと／＼奥深く案内して進

せうと、……だんく、芝居が面白くなつて來るのですが、その時は中津の曾木墨莊、松川修庵などといふお歴々も、一所に出かけて、又もや、きのふの舞臺になり、そこへ仕出し茶店のおやじが出て來て、言葉をかけ、旦那、もうそこにお正月が見えてゐる師走の末、この年の暮に何の御用で、こんなところを毎日うろくしてござる、いのし、は、まだいくらでもござりますと申しました。

一行はだんく、深入りしての戻り道に、いろく、滑稽の餘興——山陽は乗り物の底がぬけて泥まみれ、雲華も馬から下りて尻からげ、やつと正行寺へ歸り、はじめて茶店のおやぢの言葉に氣が付き、さうでなくても歸心矢の如き最中、誕生日の十二月廿七日迄には是が非でも廣島へ立歸つて、内祝の盃に、老母榎颯へ無事な顔を見せねばならず、鶴崎からにしようか、佐賀の關からがよいかと思ふたが、來がけの下の關へ返つて、廣江殿峰、秋水父子に再會を樂み、そこに越

年して、到頭丸一年ぶりに廣島へ著し、そのま、榎颯を京都へ案内といふ事になりましたが、さて如泰の事は、廣島で子の聿庵に、その話をして残念がつたのを、春琴の弟子鳥越烟村がそれをき、長崎行の節わざく、村井をたづね、その畫をていねいに臨寫して、聿庵へのみやげにしたのを、聿庵早速京都へ送つたが、折角おまへが貰つたのだからと、その次第を記して我子へ贈り返したのでした。

山陽が耶馬溪の執着は、一生涯つきまとうてをりました、天保三年の秋、アノ略血の歌といふ詩を作つて、長の病牀についてゐた時、親友大阪東町奉行所與力の大隠居——といつても男盛りの身を退身して、洗心洞塾を開き天満與力町で書を教へてゐた一代のくせ者、大鹽平八郎中齋が病氣見舞に參りましたのを非常によろこび、うれしさの餘り、瀕死の大病を忘れて、來年の春にでもなつたら全快もするであらう、一つ九州へ君を案内して、耶馬溪を見せようじやないか、オ

オあのやかましい晝巻物の耶馬溪か、それはありがたい、せひお伴がしたい、それ迄にはドウカ病氣を直して置いてくれと、ふたりは手を握り、笑つて別れましたのが、それが互に一生の永の訣れとなつたのでございます。來年の春どころか、間もなく九月廿三日に山陽は息を引き取り、その死を知つた大鹽は、涙ながらに祭文として弔詩を作り、この話をくはしく書いて、目の前で山陽に言葉をかけ、耶馬溪へ同行することの出来ないようになった悲みを、どうしてくれるのだと残念がつてをります。山陽の魂魄は、今も耶馬溪の上にさまよつてをるでせう。何うか鐵道の方で、この望みを——死んでも忘れないその望みを遂げさせていたゞくことは出来ませうか、ひとり山陽のみではござりませぬ、山陽先生を追慕する無数の人々も、何かこの山に山陽の記念物がほしいでせう。あの耶馬溪の詩から一二首を擇んで「詩碑」なりとお建てになつてはいかゝかと存じます。

全體、人の花は赤く、よその物は甘いもので、耶馬溪は土地の方々には別段何とも思つてゐないでも、始めてそれを見た山陽が、日本一と吹聴してみると、成るほどそんなものかなと、竹田先生が、文政八年の春三月、日田から耶馬溪に入り、それを又得意の畫に書く。出ざらひな淡窓先生もみこしを上げて出て來る、日本國中から押しかけて來る。昔の豊前の山國谷が、つひに今日は日本の、更に世界の耶馬溪にならうとしてをります。「拍手」〔昭和八・九・七〕

耶馬溪盆をどり

好尚散人作
中津、米屋町連曲

一

百十六年そのむかしく
日田のひろせの淡窓と
ふるいなじみの館林
いつまた逢へるか只獨り
巖が手招く、谷間には
畫にも書けない筆すての

二

頃は師走の短い日あし
みちでわかれて守實で
別れとむない立話し
山國谷へとさしかゝる
水のながれがさら〜と
峰も手に取る如くなり

そんな文句はワシヤ嫌ひ
アレ宮園のみねの松
越えて見えるは屏風岩
瓢たんからつば古城へ急ぐ
顔を合して、雲華さん
サア〜奥へとあないする

三

あけて、ま一度屏風岩
何の御用でござつたな
雲華上人、先に立ち
けしきに見とれて山駕の

畫いて見たいなこの景色
雲の森から柿坂を
獵師の手からゐのしゝで
脚もよろ〜ほろ酔の
山陽先生お早いお著ぢや

きのふの獵師がふしん顔
來ないで何と正行寺
ついてゆく程日本一
底のぬけたも御存じない

落ちてまぶれて泥だらけ
雨ですべつた妙義山
うちわが揚がる耶馬溪の

むかし通つた中仙道も
日本一は何うしても
ことしもはづむ盆をどり

〔注〕 余抵レ橋〔屈智林〕。 轎底崩脱墜レ泥。 就ニ市居ニ療レ衣。 遂穿レ鞋行。
〔山陽、耶馬溪圖卷記——文政二年初稿〕

サーサク、ヨイヤサ

昭和八年十月十日 印刷
昭和八年十月十六日 發行

定價金參拾錢

編輯發行 兼印刷人 耶馬溪鐵道株式會社
小 疇 壽

印刷所 民友社印刷所
東京市京橋區銀座西八丁目五番地

發行所 大分縣中津市豐田町
一丁目一五四九番地 耶馬溪鐵道株式會社

終

